

2021年8月21日

第5回実心実学読書会

裊寛紋先生 宣長はどのような日本を想像したか——『古事記伝』の「皇国」を読んで

東北大学 文学研究科 博士課程一年 増田友哉

1. はじめに—宣長研究の問題と本書の立場—

・ 神野志隆光氏

『古事記伝』が、『古事記伝』として読まれていない

自分の語ろうとする宣長を『古事記伝』のなかに見出している

『本居宣長「古事記伝」を読む』①

・ 田中康二氏

宣長へのアプローチは様々なレベルにおいて引き裂かれている

『本居宣長の思考法』

・ 本書の立場

国学から国文学へと単純な延長線の上に宣長を置くことから一旦離れてみる。それは近代学問の在り方そのものに対する批判的な省察の契機にもなるはずであろう。

本書は、『古事記伝』に即して、宣長の発見した「皇国」について考えようとしたものである。

偏狭な皇国主義者として無批判に論じ続けられてきた近代日本における宣長言説を問い直すための試み

・ 本書の方法

『古事記伝』を、注釈を通して新たな神話を成り立たせたテキストとして捉える

『古事記伝』の〈古事記〉が具体的にいかなる物語になったかを明らかにする

『古事記伝』の読みが『古事記』と最も乖離しているところを検証

→「皇国」という新たな物語を『古事記伝』は『古事記』から創造

2. 内容要約

【第一章】『古事記伝』のつくった「外国」

・ 外国を語らない『古事記』から『古事記伝』は「常世国」を「外国」に結合する

→『古事記』における「常世国」を「外国」に比定

→新しい世界像の構築、『三大考』の「皇国」中心の世界観

→自己完結的『古事記』、中国を疎外、宣長の『古事記伝』は『古事記』の語れなかった世界をテキストの強引とも言える解釈で突破、ある意味では『古事記』の描こ

うとした「古代」に相応しい可能性

◎『古事記伝』のつくった「外国」の物語は、「皇国」に帰される問題

【第二章】『古事記伝』における「カラ国」の克服

・「カラ国」に対抗し、克服する「皇国」という物語の創出

→『古事記』の「韓国」を「空国」と解釈する宣長、「韓国」の排除が目的ではない
天孫降臨～神武東征を皇統による「国覓ぎ」～「皇大宮の始り」という新たな視点で統一、外国ではなく、空虚地としての「空国」が必要、「皇国」の物語

→カラへの対抗意識は「漢」として表記、「漢」に収斂される「韓」、同時代的

→宣長にとっての日中国交の開始は推古天皇の遣隋使派遣、漢籍における卑弥呼や倭の五王は熊襲が「大和」を偽僭、大和朝廷固有の「古代」という主張

→「倭」、本朝から「皇国」へ、同時に「中国」は「漢」、朝鮮は「蕃国^{ミヤツコクニ}」へ
宣長の批判は「まことの道」を伝える「皇国」の人々が「漢意」に覆われている点

現実的に万国の「臣服」を主張するわけではない

◎「皇国」の起源論、固有の「古代」を描く上で「外国」を異質とする他者認識

『古事記伝』執筆中に「御国」から「皇国」への自覚、「皇国」という物語の完成へ

【第三章】『古事記伝』のつくった「皇国」

・「皇国」という語を選択した意味について用例から考察

→「皇国（の古）言・語」、「物」、「事」

「漢国」の影響以前の「皇国」の「事」を探す作業、そしてそれが現在も存在し有効であることを注釈作業によって確認、神代と現代がつながる問題

→「事の跡」がある「皇国」の真实性、「古の形」を遺さない「漢国」の虚偽性

三種の神器、皇統の存続に「皇国」の「漢国」への優越性、「空理」に対する「妙理」

→「君臣」（キミヤツコ）という『古事記伝』の解釈

「漢国」の「君臣の道」は易姓革命、「皇国」の「君臣の分」による皇統は永久不変職位としての「臣」（オミ）、「君」に対する「臣」（ヤツコ）＝「奴」

「臣」の用例が少ない『古事記』から「奴」を同概念とすることで、「君臣」の物語を読み取る可能性、「皇胤の人」と「凡人」の区別が「皇国」に厳存を証明

→『古事記』が『日本書紀』よりも皇統を説明する「君臣の差別」を正確に伝える

あるべき天皇記を『古事記』を補足する形で『古事記伝』において実現

『古事記』を皇統の起源の物語として『古事記伝』は読むことで、「皇国」の正しい皇統を伝える物語としての『古事記』が成立

神代から断絶することなく現在まで続く「皇国」の物語は、「実の事」、『古事記』が世界を捉える原典に

→「御国」から「皇国」へ

「神国」は新羅王の発言、天皇の国としての自国主張が含まれる「皇国」

→「神の道」を「人の道」として読む

「皇国の道」は「人の情」に適うため「真の道」となる

◎『古事記』が天皇統治ではなく、目の前にある世界、人間世界の総体をも問うものへ

「皇国」という語の選択と『古事記伝』が『古事記』からつくった新しい世界の物語はそれを追究した結果

【終章】宣長学の解明に向けて——「皇国」の物語の達成が導くもの

宣長以降の「皇国」

宣長問題

3. 疑問点

・「近世東アジア」という時代・空間との繋がりに関して

① どうして近世東アジア社会において『古事記伝』は『古事記』から新たな物語を読みだそうとしたのか。本居宣長という一人の人物、人格という側面＝「彼の自己確証の営み」を越えて、『古事記伝』が近世東アジアに登場し、それが人々に受容された理由とは何であるか。

② 同時代の朝鮮半島では、どうして本居宣長のような言説が生じなかったのか。（或いはあるのか。）

～時間があれば～

・「漢意」批判と「やまごころ」の問題について

『漢文』対『古言』の構図、「『漢意』批判とは、『皇国』の『物学び』のために唱えられた方法」、「『からごころ』対『やまごころ』『やまとだまし』といった図式の言説は宣長に由来する主張ではない。」180頁。

そも／＼人の心は、皇国も外つ国も、ことなることなく、善悪是非に二つなければ、別に漢意といふこと、あるべくもあらずと思ふは、一わたりさることのやうなれど、然思ふもやがてからごころなれば、とにかくに此意は、のぞこりがたき物になむ有ける、人の心の、いづれの国もことなることなきは、本のまごころこそあれ、からぶみにいへるおもむきは、皆かの国人のこちたきさかしら心もて、いつはりかざりたる事のみ多ければ、真心にあらず（中略）大かたこれらの事、古き書の趣をよくえて、漢意といふ物をさとりぬれば、おのづからいとよく分るゝ

『玉勝間』一の巻

ここには、「からぶみ」は「かの国人のこちたきさかしら心」によって表されたという宣長の考えがある。そのため、単に『漢文』対『古言』の構図や『皇国』の『物学び』の方法だけではなく、「漢意」対「まごころ」という形での対立関係が存在するのではないだろうか。（『古事記伝』以外での宣長の思想）そしてその「まごころ」の発露が皇国の歌や古代のみから知ることが出来る以上、そこには『からごころ』対『やまごころ』という図式が宣長の言説に内在するのではないだろうか。（ここには、まごころ⇌実心を求める宣長の姿が存在する。）